

ERP刷新は「システム導入」ではなく 「業務変革」

OMデジタルソリューションズ ベトナム工場が挑んだIFS Cloud導入



OMデジタルソリューションズ株式会社

東京都八王子市 製造業 従業員数 1950名

OMデジタルソリューションズ株式会社は、デジタルカメラをはじめとする精密機器・光学技術が強みに、グローバル展開を進めるメーカーである。2025年度からは「コンシューマー事業」「ものづくりソリューション事業」「新規事業」の3事業ユニット体制を軸に、競争力強化と意思決定の迅速化を推進している。

今回ERP刷新を実施したベトナム工場は、同社における中核生産拠点であり、“ものづくりのマザー工場”としてグローバル供給体制を支えている。一方で、長年利用してきた基幹システムの老朽化やExcel中心の運用など、現場とシステムの乖離が課題となっていた。

こうした背景から同社は、業務標準化とリアルタイム経営を実現するため、ベトナム工場を起点にIFS Cloud導入プロジェクトを推進した。



導入サマリー



導入前の課題



旧ERPの老朽化・複雑化（キメラ化）

2002年導入の旧ERPは長年のカスタマイズにより複雑化し、改修・保守の負担とコストが増大。



ERPがあるのにExcel中心の運用

データをダウンロードし、Excelで加工・分析する運用が常態化。リアルタイム性や正確性に課題。



現場とシステムの乖離

導入当初の業務プロセスや財務・経理主導の運用に最適化され、変化する製造現場のニーズへの対応が困難。



改修・バージョンアップ負担の増大

カスタマイズの積み重ねにより、バージョンアップ時の影響範囲が不明確で、負担・コストも増大。



導入の効果



業務の透明性向上と意思決定の迅速化

現場課題の可視化と情報連携のスピードが向上し、マネジメントへの伝達が迅速に。



リアルタイム運用による業務改革

実績のリアルタイム入力やバックフラッシュ運用の定着により、業務精度とスピードが向上。



分析スピードの向上

標準レポート・クイックレポート機能により、必要な情報を必要なタイミングで迅速に取得・分析可能。



運用保守コストの大幅削減

ユーザー部門の内製化も進み、標準レポート・クイックレポート機能により運用保守コストを従来比70～80%削減。

“ERPがあるのにExcelがなくなる” 現場の課題

グローバル展開を進める同社では、事業構造の変化に伴い、IT基盤の見直しが重要な経営テーマとなっていた。

しかしベトナム工場では、2002年に導入した旧ERPが長年のカスタマイズにより複雑化。導入当初の業務プロセスや財務・経理主導の運用に最適化されていたため、多様化するビジネスラインや変化するものづくりへの対応が難しくなっていた。

現場ではERPデータをExcelへダウンロードし、加工・分析する運用が常態化。リアルタイムでの状況把握や迅速な意思決定にも課題が生じていた。



「現場の改善をやろうとすると、ERPを使うよりも、データをダウンロードして加工・分析する形になっていました。システムそのものが効率の良い“中心”として存在していなかったのです。」（執行役員 松音英明氏）

さらに、改修を重ねた結果、システムは“キメラ化”。保守やバージョンアップ時の負荷・コストも増大していた。

「長年のカスタマイズの積み重ねで、いわゆる“キメラ化”した状態でした。どこを変更すると何に影響が出るのか分かりにくく、改善にも時間とコストがかかっていました。」（コーポレートIT Vice President（インタビュー当時） 大江友樹氏）

また、現場からの改善要望を取り込むたびにカスタマイズが増え、バージョンアップ時の負荷も年々大きくなっていった。

「カスタマイズを重ねた結果、次のバージョンアップ時には全部をケアし直さなければならない。そうした負担が雪だるま式に増えていく状態でした。」（松音氏）

こうした背景から、現場業務と経営判断の双方を支え、将来の事業拡大にも柔軟に対応できる新たなERP基盤の構築が必要とされていた。



なぜIFS Cloudとアルファストを選んだのか

ERP刷新にあたっては、複数のグローバルERPを比較検討した。

重視したのは、製造業への適合性、グローバル対応力、そして標準機能の充実度である。特に評価されたのが、生産計画や在庫管理におけるシミュレーション機能だった。

「他のグローバルパッケージも比較しましたが、最終的にはデモでの評価が決め手になりました。特に生産計画や在庫のシミュレーション機能は、現場の業務にフィットしていると感じました。」（大江氏）

また、導入パートナーとして選定されたアルファストについても、海外導入経験とFit to Standardへの理解が高く評価された。

「海外も含めたIFSのリソースが豊富で、グローバル案件を実行できる体制が整っていました。Fit to Standardの考え方をしっかり持っていた点も大きかったです。」（大江氏）

カスタマイズをやめる — Fit to Standardへの挑戦

本プロジェクトの根幹となったのは、「業務にシステムを合わせる」のではなく、「標準機能に業務を合わせる」というFit to Standardの考え方だった。

プロジェクトは2024年7月に開始。約15カ月という短期間で、調達・製造・在庫・会計を対象としたビッグバン導入を進めた。

従来のように個別要件ごとにシステムを作り込むのではなく、業務そのものを見直しながら標準化を推進。ERP刷新を単なるシステム置き換えではなく、“業務変革”として位置付けていた点が、本プロジェクトの大きな特徴だった。

“システム刷新”で終わらせない 業務改革への取り組み

“勘とExcel”から脱却した生産計画

従来環境では、MRPシミュレーションを本番環境で行っていたため、Excelによる事前調整や長時間のバッチ処理が必要だった。

IFS Cloud導入後は、シミュレーション環境を本番環境と切り分けて構築。複数パターンを事前検証しながら計画立案できるようになり、生産計画の精度とスピードが大きく向上した。



「IFSではシミュレーション環境を別立てにできたことで、本番環境投入前に評価できるようになり、精緻な計画を立てられるようになりました。」

（ITマネージャー 今村啓一郎氏）

「後でまとめ入力」が通用しない現場へ

IFSでは、各工程での実績入力や在庫連携をリアルタイムで行う運用へ転換した。従来のような週次・月次入力では成立せず、現場の運用ルールや意識そのものを変える必要があった。特にバックフラッシュ運用では、各工程で正確に実績をつなげなければシステムが正常に機能しないため、現場への定着支援や運用ルール整備が重要なテーマとなった。

「IFSでは“製造実績はその日中に入力する”ことを徹底しなければ、必ずどこかでシステムエラーが発生し、最終的には出荷できなくなってしまう。そこは現場のマインドセットを変える必要がありました。」
(Division Director兼城賢一氏)



最大の難関はデータ移行と現場教育だった

本プロジェクトで最大の山場となったのが、データ移行と現場定着に向けたトレーニングだった。旧ERPには長年の運用ルールや自動仕分けロジックが蓄積されていたが、その多くが明文化されておらず、一つずつ紐解きながら整理する必要があった。

「旧システムの長年の運用の中で、“どういう考えで自動仕分けになっているのか”が分からない部分も多く、結果を見ながら一つずつ紐解いていく必要がありました。」（今村氏）

さらに、移行後は旧システムとIFS双方のデータ整合性を確認する必要があり、膨大な確認作業が発生。売掛・買掛データを含む多種多様なデータを並行して整理・移行しなければならず、プロジェクト終盤まで難航したという。ファイナンス担当者も、当時の苦労をこう語る。

「移行した後、このデータが合っているかどうか、もう一度全部確認しないといけませんでした。もし旧システムのデータとIFSのデータが違う場合は問題が発生しますので、双方のデータが正確か確認しないといけませんでした。」（ファイナンス担当Dung氏）

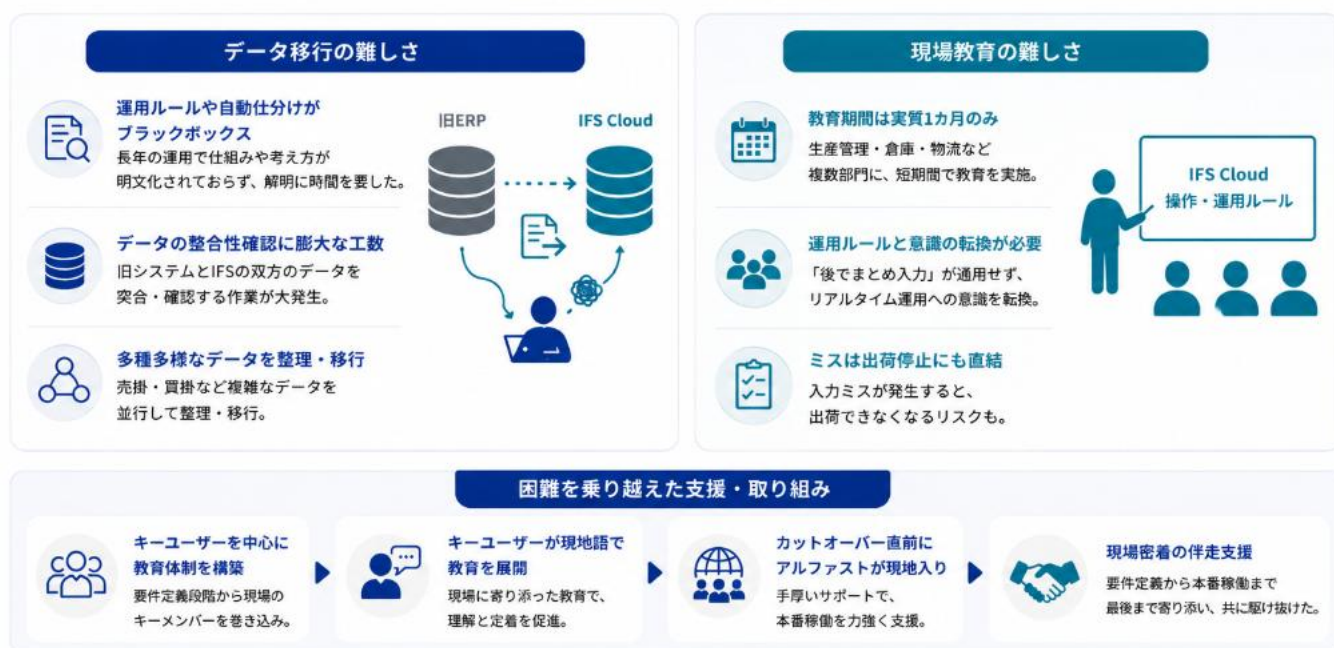
加えて、現場教育に使えた期間は実質1カ月のみだった。対象は生産管理・倉庫・物流など複数部門にまたがり、多くの現場スタッフへの教育が必要でした。

「各スタッフが作業を正しく理解しないとミスが発生しますので、トレーニングは本当に大変でした。実際、1カ月しか時間がありませんでした。」（生産管理担当Van氏）

こうした厳しい状況を支えたのが、キーユーザーを中心とした教育体制と、アルファストによる現場密着型の支援だった。プロジェクトでは、要件定義段階から現場のキーメンバーを巻き込み、業務理解を深めたうえで、キーユーザーが現地語で各スタッフへ教育を展開。さらに、カットオーバー直前にはアルファスト側も現地入りし、手厚いサポートを実施した。

「最後は本当にオペレーション教育の時間が足りませんでしたが、現地でかなり手厚く支援してもらい、なんとか駆け抜けることができました。」（今村氏）

プロジェクトを通じて同社が強く実感したのは、「要件定義やシステム構築だけでなく、データ移行や教育こそが、本稼働後の品質を左右する」という点だった。だからこそ、現場に寄り添いながら最後まで伴走するパートナーの存在が、成功の大きな支えとなった。



業務の透明性とスピードが大きく変わった

IFS Cloud導入後、同社では業務の透明性が大きく向上した。これまで見えにくかった現場課題や業務負荷が可視化され、現場とマネジメント間の情報連携スピードも向上している。

「業務の透明性が非常に増しました。現場で起きている課題が、マネジメントまでしっかり伝わるスピードはすごく速くなったと思います。」（松音氏）

財務・管理面でも大きな改善が見られた。IFSのレポート機能やクイックレポート機能により、これまで取得に時間がかかっていた情報を、必要なタイミングで迅速に分析できるようになった。

「分析するまでのリードタイムは確実に短くなったと思います。」（兼城氏）

特に、売掛金のエイジング管理など、従来のシステムでは多少の加工が必要であったところが、IFSではビジネスレポートとロビー機能により、欲しいデータのタイムリーな状況が即時に把握できるようになり、管理業務の効率化につながっているという。

さらに、ユーザー部門自身でレポート作成やデータ活用を行えるようになったことで、IT部門による内製化も進展。結果として、運用保守コストは従来比70～80%削減を実現した。

「運用保守だけで見ると、ベンダー費用は70～80%ほど削減できています。」（大江氏）

次のステージはグローバル展開へ

同社では、ベトナム工場での成果を踏まえ、今後はグローバル拠点への展開も視野に入れている。現在は、欧州拠点に残るレガシーシステム刷新に向けた検討を進めている段階だ。

「日本やベトナムで導入した仕組みを踏まえて議論しています。現地でもIFSのケイパビリティを感じており、前向きに検討できればと思っています。」（大江氏）

また今後は、AIや各種ソリューション活用による業務高度化も視野に入れており、リアルタイムなデータ活用基盤を活かしたさらなる改善が期待されている。

まとめ

本プロジェクトが示しているのは、ERP導入の本質は単なるシステム刷新ではなく、“業務と意識の革新”にあるという点である。

同社では、従来の業務プロセスや現場運用そのものを見直しながら、リアルタイム運用への転換や業務の標準化を推進した。その過程では、現場定着やオペレーション変更に伴う苦労も多かったが、プロジェクトを通じて「**業務の本質を知る**」の重要性を実感したという。

「アルファストには、当社固有の業務プロセスやベトナム現地の事情まで理解した上でサポートいただきました。単なるシステム導入ではなく、現場オペレーションも踏まえて伴走いただけたと感じています。今後も安定稼働を継続しながら、当社の成長につながる提案を期待しています。引き続き、良きパートナーとして一緒に取り組んでいければと思っています。」（松音氏）

ERP刷新の成否を分けるのは、機能だけではない。現場と向き合いながら変革を推進できるパートナーの存在こそが、プロジェクト成功の鍵となる。

※掲載している所属・役職はインタビュー実施時点のものです。

情報

導入ソフト： IFS Cloud

プロジェクト期間： 1年3ヶ月

システムユーザー数： 135ユーザー



株式会社アルファスト

100-6208 東京都千代田区丸の内1-11-1 パシフィックセンチュリープレイス丸の内 8F

03-6860-9686

sales_japan@alphast.com

www.alphast.com

Alphast